

雨の夜のプレゼント

なおい としあき
猶惟 寿昭

朝倉英樹は、朝それを偶然に発見した。

結婚三年目の妻・紀子の誕生日が迫っていて、紀子が既に黒のロングドレスを買っていたのを知っている。英樹は紀子の為に買った真珠の首飾りを隠して置く場所を探していたのだ。贈り物用にラッピングされた箱を、寝室の化粧ダンスの一番下の引き出しに入れておこうとしただけだった。紀子に発見されれば、それはそれでその時の紀子の驚いた顔を見れば嬉しいのだ。

引き出しを開けると、まさにそれが入っていたのだ。

日本の希少野生動物シリーズのクワガタの切手が貼られた封筒。中央には朝倉紀子の名前が、大きく男性的な筆跡で書かれている。消印の日付は一週間前。封筒はホテルの客室に備え付けのものらしく、ホテルの名前が片隅に印刷されている。

その手紙を手に取りろうとしたその瞬間に、紀子の明るい声が玄関の方から聞こえて来た。

「あなた、それじゃあ六時にね」

会社の帰りに英樹が紀子を迎えに行く、いつもの時間を確認しているのだ。お互いに特に用事がなければ、ほとんど毎日決まった時間だから敢えて念を押さなくてもいいのだが、毎朝の癖になっている。つまり、「行ってきます。先に家を出るわね。会社の帰りにいつもの所へ迎えに来てね」と言う意味の、出勤の際の儀式なのだ。

二人は結婚を機に、郊外のこの中古マンションに引っ越してきた。紀子の通う証券会社は、バスと電車を乗り継いで一時間の所にある。英樹は、年代物のトヨタ・カローラに三十分乗って、大手の老舗食器専門商社に通勤する。

お互いに特別な用事が入らない限り、英樹が仕事を終えると紀子の勤めている会社の近くまで、車で迎えに行くようになって久しい。英樹には英文学修士の学歴があるが、そんなものは今の仕事にも普段の生活にもちっとも役に立ってはいない。敢えて言えば、英語が得意だという紀子と仲良くなれたきっかけになったことぐらいだろう。

紀子を送り出してから、英樹が出勤するまでには未だ時間がある。英樹は思い出した。昔見たSF映画で、或る物を一心不乱に凝視することで、その対象物を燃やすことができる能力を持つ男の話だ。今の英樹にもまるでそんな力があるかのようにだった。目の前にある封筒から英樹は目が離せなくなっていた。

その封筒をじっと見つめることで、英樹が見たくない、見てはならない手紙を燃やしてしまおうとしているのだ。読んだら悲嘆にくれ、泣き叫ばねばならないのは英樹自身なのだから。書いてある内容は、英樹にとって人生の終わりを決定づけるものに違いないのだ。

英樹は引き出しを閉めた。何も心配する必要はないのかも知れないではないか。ホテルの名前入りの封筒であっても、必ずしもそのホテルに宿泊している人物からのものとは限らないではないか。それに、男っぽい殴り書きといったって、ほんとうはそれ程男っぽくはなかったかも知れない。きつとドラマチックに男性的な書き方をする女性から来た手紙かも知れないのだ。

男っぽいとはいっても、女性だって必ずしもきめ細やかな優しい筆跡の人ばかりではないはずだ。紀子は常々英樹が嫉妬深い性質だと言っていたが、これでは将にそれを証明するようなものではないか。たわいのない手紙は化粧ダンスの引き出しにたわいもなくしまいこまれただけ。別に紀子は英樹からその封筒を隠そうとしたわけではないのだ。それなのに心臓は高鳴り冷や汗が顔を滴り落ちて、身体は震えつばなしだ。

英樹は呟いた。

—— 神様、オレは何と哀れな男なんだろう。こんな自分が恥ずかしい——

バスルームに行き顔に石鹸泡を塗りたくって、いつもの執拗な朝の十分間の髭剃り・洗顔の儀式を行い、だんだん薄くなっていく頭髪を整えた。

それから、寝室に戻って白いワイシャツ、濃紺のネクタイ、紺のブレザーとダークグレイのズボンベッドの上に並べる。全部身に着け終わると、どう見ても陽の光の注ぐ春の朝、これから仕事に出掛けようとする典型的なサラリーマンだ。

英樹は寝室のベッドの傍に立ち尽くし、紀子の化粧ダンスをじっと見詰めた。多分、英樹は単に手紙を燃やそうとしていたのではない。ダンス全部を燃やそうとしていたのに違いない。

リビングの時計が八時十五分を知らせている。今家を出なければ遅刻してしまう。遅刻したら女性上司の濱西部長から大目玉を食らうのは必至。それ以上に、夏のボーナスがごっそり減らされてしまい、紀子にも愛想を付かされてしまう。

英樹は声を出して自分に語り掛けた。

—— オレは一体何をしようとしているんだ。考えられるのは只一つだけ、オレは未だその手紙を読むべきかどうか決めかねている。その手紙を持って会社に行つてさえしまえばいいんだ。もし読もうと決めたら昼飯時にさっと目を通せばいい。

だけど恐らくオレは決して読まないだろうな。紀子のことになったらオレは

すべてを信じているからさ。それに自分のことを、妻に來た郵便をこそこそと読んでみるような情けない男とは思いたくもないよ——

英樹は化粧ダンスの引き出しに手を差し入れた。指が封筒に触った。

——オレが手紙を読まないだろうことは多分確かだ。第一、仕事が忙しくてそんなこと皆忘れてしまっているかもしれない。

しかし、もしもひよつとして読もうと決心するかもしれない——

英樹は手紙を掴むとブレザーの内ポケットに大事に入れて、引き出しを閉めた。キッチンでカップに残っていた冷たくなりかけのコーヒーの最後の一口を飲みながら、新聞の星占いを読む。

——悪い報せだ、いつものことだけれど。こんなもの読まなければよかったんだ、まったく——

それから英樹は急いでマンションの地下駐車場に止めてある愛用のカローラに向かった。キーを回したが、エンジンが掛からない。三度目にやっと車は機嫌を治す。車を購入した代理店で、つい先月点検に出したばかりなのに。英樹は新聞の古いコラムを恨めしく思った。

朝倉英樹が会社に着いて間もなく企画会議が招集される。口うるさい濱西峰子お局部長が取り仕切る会議はほとんど部長の独演会。私語は禁止。遅刻は勿論許されない。会議室に向かう途中で英樹はボールペンを廊下に落としてしまう。それを拾おうとしたら、七十五キロの体重がつんのめってしまう。重く鈍い音が響く。立ち上がると、今度は脇に抱えていた書類入れが廊下に落ちた。

筆記用具他を全て回収して会議室の後ろのドアを閉めて後方座席に着席すると、お局部長が会議の開催宣言をするのとはほとんど同時だった。部長は黙ってメガネの奥の細い目で英樹を一瞥した。会議中、英樹の存在は全く無視され、発言の機会を与えることもなかった。

会議が終わって、部屋を出ようとする英樹にお局部長が叫んだ。

「朝倉君、ちよつと残って。あなたの立てた企画書について教えて貰いたいことがあるわ」

話しが済んでやっと解放されると思って会議室を出ようとする、背後から声が飛んできた。

「何か落としたわよ、朝倉君」

英樹が振り返ると、部長の手に封筒があった。かざした封筒の宛名を読むと、好奇心で目をまんまるにして追い打ちをかけるように部長が言う。

「あなたは、そんな類の人なの、朝倉君？」

「そんな類の人？」

「奥さんに來た手紙を読むような連中よ」

「ああ。そんな種類の人のことですか？」

「あなた、そうなの？」

「いいえ」

すると部長は首を振りながら、

「それじゃあ、これをどうするつもりなの？」と続ける。

「どうするつもり、ですって？」

「あなた、オウムじゃないんだから」

「今朝、間違つて持つてきちゃっただけなんです」

「間違つて？」

「ええ、今朝急いでいたから」

濱西部長は再び首を振った。お局部長はよく首を振る。

「あなたもそんな類の人なのね。そうでしょ、朝倉君？ 私の最初の二人の亭主たちもそうだったわ、ろくでなしの連中だわ」

部長は封筒を英樹に手渡すと、目の前をかすめるようにして通つていき、廊下から姿を消す。

昼食の時間になった。英樹は紀子が昨夜作つて置いてくれた弁当を手に、近くの公園に向かう。昼飯時の公園のベンチは、近隣で働くOLやホワイトカラーたちで既にほとんど埋まっている。公園の片隅の花壇を囲むコンクリートの柵に座り、弁当箱のふたを開けると鳩が近寄つて来る。

弁当を食べ終わると、上着のポケットから封筒を取り出す。男の筆跡で書かれた紀子宛ての封書。英樹は宛名の妻の名前を見詰めながら後悔していた。

——何でこの封筒を持つてきてしまったんだろう。見付けた場所にそのまま置いておけばよかったんだ——

腕時計を見ると、あと二十分で仕事に戻らなければならない時間だ。手紙を取り出して読む誘惑に逆らうことのできる二十分間だ。英樹は逆らえなかった。手紙を盗み読むことで、ますます自分が惨めになり、敗北感に苛まれることになるのを覚悟した。

差出人は山本太一。紀子の高校時代の同級生で、英樹も紀子との結婚が決まつてから紹介されて何度か会ったことがある。

手紙には、三日後の金曜日の夜に二人が会う場所と時間が記されてあった。紀子が何故このことを夫である英樹に隠していたのか？ 化粧ダンスの一番下の引き出しに入れて置いたんだらうか？

太一がこの数年間アメリカに駐在していたことは、英樹も風の便りに知っていた。手紙によると今月一杯日本に戻つてホテルに滞在しているらしい。紀子は金曜日に太一に会いに行くのだらうか？

英樹は昔のことが思い出される。そもそも、紀子はどうして会社社長の長男

で将来が有望な山本太一を選ばないで、英樹なんかと結婚したんだろう？ 太一と結婚していれば、好きな英語が活かせる駐在員夫人として海外生活を堪能して、日本に戻れば立派な家の一軒も建てることができただろうに。

紀子は太一と会うことに決めたのだろうか？ 紀子が人生をやり直そうと思えば出来ないことはない。子供がいる訳ではないし、未だ若いんだから。英樹は昼休みが終わるまで、太一に対する羨望を膨らませながら、紀子の考えているようなことをあれこれ想像しながら過ごした。

終業時間が迫っている。若い女性社員たちは、早々と帰り支度をしている。男性社員たちも、帰り際に濱西部長に捕まらないように要領よく部屋を出るのが肝要なのだ。社長方針で、社員の残業は原則禁止になって久しい。社長命令だから、社長の娘である濱西部長でさえも従わなければならないのだ。原則的には、だ。

英樹の部署は、昨年病気で亡くなった課長の補充もなく、部長が兼務している。片面に大きなガラス窓がはめ込まれた仕切りパネルで囲まれた部長室の奥で、濱西部長が古参の幹部社員と話し込んでいる時にさっと席を立って帰らねばならない。廊下では、五時になると同時に清掃会社の派遣社員が二人、灰色の制服を着て掃除機の音を唸らせ始めた。

英樹の同僚たちも既に机の上は片付け、いつでも退社できる準備が完了している。英樹が紀子を迎えに行くには時間はたっぷりあるが、うっかりぐずぐずしていたら捕まってしまうのだ。あちこちで「サヨナラ」、「お先に」の挨拶が始めている。英樹もいつものように同僚たちと一緒に立ち上がって退社の挨拶をする。

英樹が部長の居る窓際の仕切り小部屋から一番遠い側の部屋のドアに近付き退室しようとしたその時だ。

同僚が、

「おい、朝倉。お局さんがお呼びだよ。それじゃ、お先にな」と囁き、ウインクして部屋を出て行く。

「朝倉君、今朝の話の続きだけど。あなた、奥さん宛ての手紙を読んではいないでしょうね。それとも昼休みに読んだのかしら。だって、そのつもりでこっそり持ってきてしまったんですものね。」

たとえ夫であっても、奥さん宛ての手紙を無断で読むのはいけないわよ。しかも、その手紙を持ち歩いているなんて。私の場合も、そんな身勝手に無作法な亭主に愛想が尽きたのよね」

「いや、ついうっかり持って来てしまっただけなんですよ」

「あらそう、うっかりね。それなら読んでいないのよね？ だったら午後から

ずっと何でそんなに浮かぬ顔をしているの？ 奥さんに来た手紙を読んで後悔しているんでしょう？ 何が書いてあったの？」

英樹は顔に血が上って来るのを感じながら慌てて抗弁する。

「大した内容ではなかったです」

「やっぱり読んだのね。それって泥棒と同じ行為なのよ。私はね、自分の部下にそんな人がいると思うと許せない気持ちになるのよ。自分の亭主だって許せなかったんですからね。それも二人ともよ」

普段から部長に睨まれていると感じていた英樹は、ますます部長の信頼を失ってしまったとうなだれるしかなかった。

「奥さんがあなたを裏切るようなことをしたと分かるような内容だったとしても、あなたは奥さんにそのことを言えないのよ。言ったら、あなたが先に奥さんを裏切ったことを奥さんに白状することになるでしょう」

手紙の中身がどうっていうことないにしても、あなたは奥さんに無断で手紙を読んだことで自分に対して惨めになるんだわ。知らぬが仏という諺を知っているでしょう。

朝倉君。仕事もね、おんなじなのよ。私が何でこんなことをあなたに言うか分かっているでしょうね？」

濱西部長の説教はいっ終わるとも知れなかった。今年の昇格・昇給は諦めなければならぬだろう。自分たちのマンションを買い取る日は更に先に延びそうだ。英樹は紀子の顔を思い浮かべていた。

そろそろ会社を出ないと紀子と会う六時に間に合わなくなる。外は雨が降り始めている。天気予報も大外れだ。

英樹は事務所を出ると、車に乗り込んでドアをボタンと閉め、シートベルトをした。イグニションの調子が相変わらず悪い。やっとエンジンを始動させることに成功して、車を車道に進めると同時に、ワイパーを作動させてフロントガラスに降りつける雨粒を払拭する。ワイパーのブレードのゴムが古くなってから動きが滑らかでなく、キーキーと音がうるさい。

今朝紀子宛ての封筒を発見して以来の英樹の陰鬱な気持ちを、雨と夕闇がますます増幅させる。これからこの絶不調の気分の中、ボロ車を走らせながら、自分を裏切った妻を、いや、部長に言わせると自分が裏切った妻を、迎えに行かねばならないのだ。もうすぐ、その妻も車も失ってしまうかもしれない。

雨脚が激しくなり風も出て来た。街路樹の枝が風に抵抗しながら黒々とざわめいている。六時を過ぎている。紀子は英樹の迎えを今か今かと待ちあぐねているに違いない。「どまーみる」という思い掛けない声が英樹の心の中で響いている。普段なら道路の両側の商店の光が明るく輝いて、英樹を待つ優しい紀子

の笑顔を照らしている時間なのに。

紀子が市場調査係として勤める証券会社の入っているビルはもうすぐだ。風雨はますます激しさを増していた。フロントガラスに滝のように吹きつける雨粒を、今にも壊れそうなワイパーが左右に音を立てながら激しく拭き払っている。

それでもなんとかいつもの場所に車を停めることができた。舗道の向こうのビルの玄関ホールから紀子が頭にバッグを掲げながら走ってくる。それを見るなり英樹は車のドアを開けて外に出ると紀子に駆け寄った。肩を抱くようにして、車の助手席に紀子を収めて、自分も運転席に戻る。二人ともすっかり全身が濡れになっている。

長い髪を濡らして笑みを浮かべた紀子に見詰められたとたんに、あらゆる感情が一度に湧き上がってきた―愛情、怒り、恥、恐怖―。そして英樹がしたかったことは、妻を両腕に抱いて優しく、そして激しくキスをする事だった。英樹は、心の中で叫んだ―何と愛おしい女だろう、早く家に帰って一緒にシヤワーを浴びたい―

紀子が優しく言った。

「あなた、お疲れさま。酷いお天気になったわね。早く帰りましょう。あなたのこと心配していたのよ」

突然、英樹は真珠の首飾りを隠すために化粧ダンスの引き出しを開けたことを思い出した。そして封筒のことを。

英樹は言った。

「くそお。頭に来るな」

「えっ、何て言ったの？ 私、今『あなたのこと心配していた』って言ったのよ」

「分かっているよ」

「英樹さん、どうしたの？ 今日会社で何かあったの？」

車を発進させながら英樹が言った。

「何でもないよ。この土砂降り雨のせいだよ」

「そうね。それにしても、今のあなたはご機嫌がとっても斜めだわ」

「うるせえなあ」

「ねえ、あなたの生理が始まったの？」

この「生理の話」は二人の間でのちよっとした軽口の一つになっていた。結婚して数ヶ月経ったある日、紀子がいつになく不機嫌だったので、その理由を英樹が尋ねると、紀子はそれを生理のせいにした。英樹はその日に印を付けておいた。それから四ヶ月の間、毎月その日の前後には、紀子がつんけんして帰宅した。そのことを英樹が紀子に指摘すると、紀子は逆襲してきたのだ。

「わかったわ。だけど男にも生理があるのよ」

「男にも？」

「そうよ、その通り。男にもよ。だからあなたの生理が始まると、いつだって私に優しくはなくなるんだわ」

こんな会話がなされて以来、今や英樹がどうかして気難しかったりするたびに、生理が始まるのかどうか聞くようになったという訳なのだ。

「たぶんね」と、英樹は言った。

英樹の気持ちは怒りからある種の不思議な打ちのめされた疲労へと変わっていった。

雨が激しく打ち付けるフロントガラスの向こうを、眉間にしわを寄せてハンドル操作している英樹の横顔を見詰めながら、紀子は言った。

「一体どうしたっていうの？ 何をそんなに怒っているの？ 今日会社で、あの女の部長さんがあなたを酷い目にあわせたとも言うの？」

「いや別に。ただ、すこぶる機嫌が悪くてね。オレが部長の別れた二人のご亭主とおんなじだと言ったこと以外には何も酷いことは言わなかったよ」

「冗談でしょ？」

「ほんとさ」

「だけど、どうして？ あなたのどこが部長さんのご主人たちに似ているって言うの？」

「ただ『おんなじ』って言ったただだから、どこが似ているのかは分からないんだ」

心の中では、「オレがお前宛ての手紙をお前に無断で持っていたということが、部長のご主人たちとおんなじだったんだ」と呟いていた。

——機嫌の悪い理由は、化粧筆筒の中を探っていたら、お前の昔の男友達からの手紙を見付けて、お前がお膳立てしようとしている逢引のことをみんな知ってしまったからだ——

そう言いたかったのだ。

だけど実際に言ったのは次の通りだ。

「手順が悪くて仕事が遅いのがおんなじだったんだとき。こんなことしたら、今度のオレのボーナスは減らされると覚悟しておいた方がいいと言うんだ」

「冗談でしょう？」

「ほんとうだよ」

「ほんとうなの？ 嫌味な上司ね」

「社長の娘だし、二人の亭主に逃げられているからな。しかたないさ」

紀子は英樹の説明には納得しなかった。

「それにしても、あなたの不機嫌さと言ったら普通じゃないわ。何か他に理由

があるんじゃないの？」

「うるせえな」と言うなり英樹は黙りこくってしまった。

しばらくして紀子は言った。

「ねえ、あなたどこに行こうとしているの？ 家に帰る道とは違うんじゃない？」

「突然の大雨で道に水が溢れているから、広くて安全そうな道を選んでるんだよ」

「あなた、ごめんなさい。この雨だし、あなただって疲れているのに、私がいるんなこと言っつて。許してね」。こう言っつて紀子は英樹にもたれてきて頬にキスをした。紀子のいつもの優しさが戻ってくると、英樹の心の中の感情は迸り、心底からの優しさと心底からの怒りが英樹の中で激しく揺れ動いていた。

「部長さんのことは何とかなるわ」と紀子は言っつて、微笑んだ。

「たぶん部長さん、生理が始まるのよ」

英樹の怒りは消え去り、純粹で完全な愛情に取っつて代わられた。

——これがぼくのほんとうの友であり、妻であり、愛人なのだ。あの手紙には正当で純真な説明があるに違いないのだ。そうに違いないのだ——

車はやがて、もうすぐで二人の愛の巢に戻るところまで来ていた。そして、ちやうどその時だった。車のエンジンが止まったのだ。雨は少し小ぶりにはなっつていたが、裏通りの街灯の光の中に、降りしきる雨が青白く輝いて落ちている。道路を行き交う車はすっかり途絶えている。まして傘を差した人通りなど皆無だった。

英樹はボンネット開けてエンジンの様子を見てこようと思っつた。車のメカニックスについては、ほとんど知識はなかつつたけれども、紀子の手前何とか男としての矜持を見せねばならない。英樹が運転席側のドアに手を掛けると、紀子が言っつた。

「あなた、どうするの、この雨の中？ びしょ濡れになっつてしまっつわ」

「車が動かなければどうしようもないじゃないか？ ちよつとエンジンを見つくるよ」

「あなた、行かないで」と言っつて紀子は英樹の腕を掴んだ。

英樹はその手を握っつて、身体を寄せた。——なんと愛しい女なんだろう——

もう一方の腕で肩を抱くと、目を閉じつた紀子の横顔が英樹の頬を圧迫した。英樹は紀子の涙が頬を伝わるのを覚える。英樹は紀子の唇に自分のそれを、力を込めて重ね合わせる。

英樹が身体を戻したその時、白いものが二人の座席の間に落ちた。紀子がそれを拾う。その封筒をじつと見つめてから、英樹の顔を黙つたまま覗いた。

「あっ！ さっき、そのことは話そうと思ってたんだ」と英樹は悪びれて小声で呟いた。そして首を振りながら「君の化粧ダンスの引き出しの中を見たら入っていたんだ。見なければ良かった」

「そう、見なければ良かったのよ。でも、もつと私に説明する必要があるわね」
「ごめん。悪かった。謝るよ」

「何で私宛ての手紙をあなたが持っているの？ 信じられないわ」

「でもね、変な話だけど、君への贈り物を隠そうとしていたら、その手紙を見付けちゃったのさ。下着入れの引き出しに、贈り物を押し込んで、君に見付けさせようとしていたんだ。ほら、君が欲しがっていた例の真珠の……」

「えっ、真珠のネックレスを買ってくれたの？」

紀子が手紙を無断で持ち出したことに対して、それ以上追及してこなかったことに内心ほっとした。と同時に、心のどこかで紀子への猜疑心が過ぎるのを感じていた。

「うん。君の誕生日は今週の土曜日だからね」

「まあ、あなただったら！ 嬉しいわ」

紀子は嬉しそうに顔をほころばせて続ける。

「ところで、山本さんの手紙読んだのね？ 『相談があるから今度の金曜日に会いたい』って書いてあったでしょ？ 太一さんには、あなたに言ってから電話で返事しようと思ってるんだけど、未だ迷っているのよ。私の誕生日には、ひよっとしたらあなたが何か考えてくれてるかと思ってね」

「そういいながら紀子は、上目づかいに英樹の顔を覗いた。」

英樹が黙っていると、紀子は続ける。

「太一さんは、今月一杯日本にいるらしいんだけど、その間に結婚を決めておきたいらしいの。相手は私の小学校時代の同級生。むかし一度太一さんに紹介したことがあったの。二人がそんなところまでいっているとは知らなかったんだけど、私にとっても嬉しい話なのよね。太一さんが、決まるまでは恥ずかしいからあなたに黙っていて欲しいと言うので、あなたに言わなかったことは許してね。ごめんなさい。でも、あなたがこの手紙を今ここに持っていることは、正直言っただけ驚いたというより、とても気分を害したわ。でも、この話はどう忘れましょう」

英樹の心の中のモヤモヤは一時は晴れた。そんな気分になっていた。雨もほんの少し小ぶりになったのを見定めると、英樹は外に出てボンネットを開こうとした。いったん出て直ぐに車に戻る。ラッチを外すのを忘れていたからだ。

紀子が言う。

「あなた、だいじょうぶ？ 直せるの？」

「何とかしてみる」と英樹は空元気を出して言ったが、自信はなかった。

紀子がじつと英樹の顔を見つめながらいった。

「あなた、家も近いし、車はこのままにして、走って家に帰りましょうよ。家に戻ったらシャワーに入ってからだを温めましょう。今夜はワインのボトルも開けましょうよ。雨に濡れた身体のままでは風邪を引いちゃうわ」

「そうだな。また雨が酷くなる前にそうしよう」

「ねえ、覚えている？ あなたが私にプロポーズしたのは今から四年前の今日だったということ。私は、私の誕生日の三日前だったからよく覚えているのよ。あなたがいつ結婚の約束してくれるのかを、ずーっと待っていたから。今夜は、あなたにも私からプレゼントがあるのよ」

英樹は運転席から身体を乗り出して、助手席の紀子に覆いかぶさるようにして唇を合わせた。

二人は車から降りると、車を舗道ぎりぎりまで寄せてから、手を繋いで小走りに家に向かった。

英樹は濡れた衣類を脱ぎ捨てると、子供のようにキヤーキヤーと声を出しながら風呂場に入ってシャワーの栓を全開する。その間に紀子が濡れた衣類を脱ぎ棄てて、下着姿のまままで簡単な夕飯の支度をした。英樹が裸で風呂場から出て来ると、紀子も入れ替わりに風呂場に入った。

シャワーを浴びた紀子が身支度を整えてベッドルームから居間に入ると、テーブルの上には英樹から紀子への誕生日プレゼントが置いてあった。中身は真珠のネックレス、紀子が最近買った黒のドレスによく似合いそうだ。

英樹がワインのボトルを開けて、お揃いの二つのグラスに注ぐ。紀子はピンクのネグリジェの袖から細い腕を出して、グラスを上げて英樹に乾杯を促した。そしては恥ずかしそうに告白した。

「英樹さん、実は私の生理が止まってもう三カ月半になるのよ。私、このところちつとも機嫌悪くなることはなかったでしょう？ 赤ちゃんがお腹に……」

「えーっ！ 何だって？ 子供が出来たのかよ。嬉しいな。さっき言ってたプレゼントってそのことだったのか。何で黙っていたんだよ。ワインなんか飲んじやだめだろう？」

「だいじょうぶよ。英樹さんが子供を欲しがっていたから、とっても嬉しいの。今日のお昼に会社の近くの診療所で診て貰って間違いなかったから、今夜はお祝いしたかったの」

外は風と雨の音が再び激しさを増していたが、二人の部屋の中だけはまるで春の陽ざしが溢れているかのようにだった。ほんのかたときであっても。

(本文のみ文字数 110、478文字)